氏　　　名	範　露露
学位の種類	博　士（美　術）
学位記番号	甲　第 36 号
学位授与日	令 6 年 3 月 12 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論文題目	現代アートと禅：禅における協働的実践
審査委員	主査　女子美術大学大学院准教授　　楢山満照
	副査　女子美術大学大学院教授　　前田基成
	副査　女子美術大学大学院講師　　杉田敦
	副査　女子美術大学大学院講師　　粟田大輔

内容の要旨

現代アートにおける禅の影響について、先行研究の多くは、1950-60 年代のアメリカの文化状況に焦点を当てて考察している。それらの指摘は、確かに首肯できる部分が少なくないが、一方、表面的な引用を影響として捉えているのではないかというように考えることもできる。そのような疑念の一因となったのは、禅に対する先行研究の視野にあるように思われる。先行研究の多くは、禅を、個人の精神的な高まりを実現し、悟りをもたらすものと捉え、それを実現するための修行過程における師と弟子の一対一の関係に注目している。もっとも、こうした理解は一般的なものとも言える。西洋とは異なるやり方で、個人の精神的な高まりを導くものとして受け入れられた。もちろん、禅にもそうした性質はあるのだが、それは禅そのものの受容というよりは、非西洋的なものへの眼差しというようにも理解できるものだった。これに対し本論では、こうした禅に対する理解を見直し、禅の実践過程における、師と弟子の一対一の関係とは異なる関係に視野を広げていく。禅には、師と弟子とは別に、修行する弟子同士の相互関係があり、そこでは「協働」的な性質が重視されている。そのような禅の性質を視野に入れると、現代芸術において、より深いところで本質的な影響が働いていた可能性が浮上してくる。本論はその可能性を検討し、表面的な引用とは異質な、本質的な影響がどのようなものであったか、提起するものである。

第一章では、先行文献における禅の捉え方を概観していく。先行研究の禅の理解は、個人の

精神的な高まりや、悟りに焦点を当てたもので、そのため、師と弟子という、一対一の関係に注目するものが多かった。これまでの研究では、禅の現代アートへの影響が認められるものの、それは一面的な理解に基づくものと考えられる。先行研究は、禅の一部の側面、特に個人の精神的な高まりに焦点を当てている。禅思想が欧米に伝わることに重要な役割を果たした禅学者の鈴木大拙は、禅における「疑問」の重要性を強調し、その結果、師弟間の「一対一」の関係が禅の修業の基本形式とされていることを示している。具体的に、アラン・ワッツは、禅の実践において師弟間のコミュニケーションの重要性を確認しており、ジョン・ケージは、その「問答」の重要性を自らの音楽の中で強調している。また、アグネス・マーティンは、自らのインスピレーションとの「対話」を重視し、それを「心のオートマティズム」と捉え、その中で芸術作品を制作している。これらの事例から、ワッツ、ケージ、マーティンは、禅の個人の高まりのための師弟関係を基にした知的な探求と芸術の結びつきを共有している。そこにある、師弟による一対一の「対話」や「問答」が中心的な役割を果たしていることが確認できる。

こうした先行研究に対し、本論では、より広い視野で禅の実践の在り方を考察し、これまであまり重視されてこなかった、禅における「協働」的な側面に注目していく。先行研究が注目した師と弟子の一対一の関係とは異なり、修行する弟子同士の関係、またその基盤なる共同生活は、これまで光の当てられることのなかった禅の協働的な一面である。協働的な側面に基づく考察は、先行研究では捉えることができなかった、現代アートとの関係を明らかにしてくれる可能性を秘めている。

第二章は、禅の協働的な実践と、それを支える概念に注目し、これまでと異なる視点から、禅のあり方を考察していく。禅には、他者と共に自己を高め、悟りを開いていくことを目指す「共修」、そして、共修を可能にする、日々の実践の中で共に共同で操作を行うことを意味する「共住」という考え方がある。そうした考え方に基づく具体的な実践に、「挨拶」、「機鋒」、「坐禅」、「歩行禅」、「食事」、「茶礼」、「普請」がある。これらは、いずれも修行者相互の関係に基づくものを提示するものである。『碧巌録』や「清規」などの資料には、これらの協働的実践に関する記述が存在し、禅の修行者たちの「共修」の中でのやり取りや、「同修同証」という相互の悟りの確認プロセスが、他者との関わりを通じての悟りを追求する禅の特色であることが確認される。また、禅の日常修行には、坐禅と並ぶ歩行禅が取り入れられ、共住の中で一体となって歩行する実践が行われている。禅の修行は、単なる師弟間の一対一の関係だけでなく、修行者同士の協力と相互補完に基づいて行われるものであり、これが禅の修行の大きな特徴であると言える。禅における「協働」は、悟りへの道の中心的手段であり、これは個々の内的体験を大切にしつつ、共に大きな目標に進むことを意味する。それゆえに、禅の実践における協働性は、修行者たちが相互に深い関わりを持ち、共に悟りを追求する重要な基礎である。

第三章では、「共修」や「共住」という協働的実践の背景にある思想的な裏付けについて考察

を進めていく。「一切衆生悉く仏性有り」、「自他一如」、「和合禅」という表現は、禅の協働性を明確に示している。「一切衆生悉く仏性有り」は、誰もが悟り、仏性を開くことができる素質があるということで、「自他一如」は、自分と他人を一体のものとして捉える考え方である。これらは、他者を鏡とし、またその成長を促すことが、自身の成長につながるという意味を持っている。また、「和合禅」というすべての物事は関連しているものである考え方もある。これは、環境としての社会との関係を見つめようとするもので、ここにも、自己と他者を分け隔てず、互いを尊重し、助け合いながら共に成長していくことを重視しようという禅の精神が表れている。実際の実践に加え、その理念を分析することで、禅における協働的な実践をより深く理解することが可能になる。

第四章では、現代アートにみられる協働性について検討する。現代アートの分野では、協働的な種々の活動がある。例えば、アーティスト間の協働性ということで言えば、今日のアーティスト・コレクティヴの活動を例としてあげることができるだろう。先行研究でも取り上げられた60年代のアメリカの現代美術においても、その萌芽はすでに見られ、フルクサスはそれを代表するものである。先行研究では、ジョン・ケージやナム・ジュン・パイクなど、アーティスト個人との関係は検討されているが、フルクサス全体との関係については論じられていない。フルクサスの活動は、80年代のグループ・マテリアルのような協働的実践を経て、現在、世界中で行われているコレクティヴな活動に発展していく。また、視野をアーティスト以外にも広げれば、関係性の美学に基づく、観衆とアーティストの関係の問題、さらにはそこから一歩踏み込んで、実際に社会的に有意な目的を果たそうとする、ソーシャリー・エンゲージド・アートについても概説していく。

第五章では、第四章で検討した現代アートの協働性と、禅の協働性の関係について考察していく。例えば、ケージの『4分33秒』と禅の公案「隻手の音声」は、外部世界との関係の再認識、共創のプロセス、および内外の境界の超越という点で、深い共通性を有している。フルクサスの場合、ジョージ・マチューナスという核となる人物はいたが、それぞれの自主性も尊重され、中心のない集団として協力するかたちで活動していた。このような取り組みは、禅における「共修」「共住」の在り方と非常に類似している。ニコラ・ブリオーの提唱した「関係性の美学」に基づくとされるアーティストの活動の場合は、アーティスト同士の関係を、アーティストと参加者、来訪者までに広げようとするものである。これは、アーティストを、享受者と同等と見なすという意味で、禅における「和合禅」の考え方を想起させてくれる。禅の「機鋒」は、特別な対話を意味し、真理の探求や悟りへの追求が行われる。この対話は、現代アートのソーシャリー・エンゲージド・アートと共通点を持ち、現実に関係のある入りやすい話題で、社会に関するシリアスな相互対話の追求や協働の重要性が強調されている。エリアソンのアプローチやアイ・ウェイウェイのプロジェクト、アート祭「大地の芸術祭 :越後妻有」の例

が挙げられる。これらのアプローチやプロジェクトは、禅の協働的に労働し合う「普請」という推奨とも共通性が見える。

協働的な実践は、今日のコレクティヴ・ベースの芸術実践、あるいは関係性を重視した活動にもつながることになる。先行研究が重視した1950-60年代のアメリカの芸術表現に限っても、これまでは、ジョン・ケージなど、個別のアーティストを対象としてきた視線は、おのずと、フルクサスにおける集団活動などに広がることになるはずである。そして、「自他一如」は、「一切衆生悉く仏性有り」とも密接な関係がある禅の教義だが、「一切衆生悉く仏性有り」は、容易に、ヨーゼフ・ボイスの「誰もがみなアーティストである」という理念を想起させてくれる。ボイスには、「社会彫刻」という理念もあり、アーティストの社会性を訴えているが、禅においても、「仏法は世間にある」という考え方があり、日常の社会生活や家庭、仕事こそが、修行の場であることを諭そうとしている。単なる実践における類似性だけでなく、理念的な部分における両者の共通認識は、禅と現代アートのより深い関係を示すものである。

以上、アーティスト・コレクティヴの活動など今日の芸術活動は、禅における「協働性」との間に強い共通性が見られる。本論は、禅と現代アートの関係を「協働性」という視点から捉え直すことで、先行研究では見えていなかった、禅と現代アートとの影響関係を提示するものである。禅は、現代アートに対して、先行研究の指摘以上の本質的な影響を与えていた可能性があるのである。

審 査 の 結 果 の 要 旨

範　露露さんの学位申請論文、『現代アートと禅：禅における協働的実践』は、従来の、禅と現代アートの関係に対する考察を全面的に問い直そうとする意欲的な研究である。先行研究の多くは、50から60年代のアメリカ文化に対する禅の影響を基軸とし、時代的にも地域的にも限定された「現代アート」との関係を分析するものだが、影響そのものについては、表面的な引用を「影響」として過大評価しているのではないかとの指摘も少なくなかった。範さんは、博士課程前期から一貫してこの問題に取り組み、より本質的な影響を見出せないだろうかと考え、これまで、光が当てられることのなかった禅の理念の検討を中心に研究を進めてきた。今回の学位申請論文では、自身も含め、先行研究の問題点を検討し、その原因を、禅に対する理解の仕方にあったとして、批判的な再解釈から着手している。禅思想の理解の多くは、「師と弟子」という一対一の関係のなかで、精神性を錬磨するという枠組みに基づいているが、範さんはここで大きく視点を転じるとともに、視野を広げ、同じ志を抱き、悟り

を得るために日々実践に務める、弟子たちの相互関係に注目している。実際、禅思想のなかには、こうした相互関係を重視する実践があり、「共修」や「共住」と呼ばれている。範さんはそれらを丁寧に整理し、またその背後にある、「協働性」を重視する禅の思想、理念についても検討している。また、協働性という視点を取り入れることで、従来、禅から影響を受けたとされるものについても、異なる理解が可能になることに気づき、その性質を分析している。範さんが特に注目したのは現代音楽の作曲家ジョン・ケージである。ケージと禅の関係は、先行研究でもさまざまなかたちで検討されており、ケージ自身も、彼の代表作のひとつ、『4 分 33 秒』に関して、禅の公案、『隻手の音声(せきしゅのおんじょう)』に着想を得たものだと述べている。『隻手の音声』は、何も存在しないところにも何かある、あるいは、有無という概念自体を超えようとするものと理解されるのが一般的で、そうした理解は、ケージの作品の構造と程よく親和するものであった。しかし範さんは、そうした従来の理解だけでなく、ケージ自身が当時、さまざまなかたちで試みていた、協働性に対する意識をももたらしたのではないかと考え、以下のような理解を見出していく。『4 分 33 秒』の、何も音のない時空間は、存在しないことの意味や有無そのものを問うという枠組みを超えようとするものであるが、それだけでなく、他者の紡ぎ出す音を受け入れ、許容する場でもあった可能性がある。範さんの理解は、協働性の萌芽がそこにあったのではないかと提起するものだが、彼女のこうした理解は、従来の禅と芸術表現の関係を、大きく見直すことが可能であるということを示唆するものでもある。範さんは、ケージに見出した協働性を、ケージ自身も参加し、ケージに師事したナム・ジュン・パイクやヨーゼフ・ボイスも参加したフルクサスへと展開していく。フルクサスと禅との関係は、先行研究においても指摘されてきたが、それはあくまでもパイクの「禅」を前面に出した作品タイトルや、静謐性や、ミニマリズムなど、いわゆる禅的とされるステレオタイプな性質を引用したものとしてであった。けれども、範さんが見出した「協働性」という視点に立つと、フルクサスを、今日の現代美術において重視されている協働的な実践の、ひとつの源泉として捉える可能性が拓けてくる。またそこから、80 年代のグループ・マテリアルに代表されるアーティスト・コレクティヴへの展開、90 年代に台頭してくる、ニコラ・ブリオーによって提起された「関係性の美学」という概念で整理することのできるアーティストたちの実践、またさらには、ソーシャリー・エンゲージド・アートなど、現代美術全域に対する広範な影響があったのではないかという可能性も見えてくる。範さんは、これらの現代美術における実践と、禅の協働的実践とを丁寧に対照し、将来的に充実が望まれる研究領域が存在することを提起している。現代美術における協働的傾向については、社会主義運動や共産主義、共同体主義など、20 世紀の思想的な動向からの影響も無視することはできず、範さん自身、それらの動向の検討の必要性に注意を促している。しかし、のちにアウトノミア運動に統合される 60 年代のイタリアのオペライスモ(労働者主

義）は、むしろ禅からの影響を受けており、範さんの視座を、そうした動向の成り立ちの理解に応用するという、逆向きの可能性もあるということを付け加えておきたい。以上、禅と現代美術という、共に広大な領域を、ジョン・ケージを核として結びつけることによって、現代美術理解に対する新たな有意味な視点を提起したことの意義は大きく、加えて、社会理解に対しても展開の可能性を示しているという点も加味し、範さんの研究を、学位論文にかなうものであると判断した。